

「海峡を越えたまちづくりを考える」 関門の景観づくりと建築

報告：池添昌幸・九州大学

平成13年10月に下関市と北九州市が制定した「関門景観条例」をテーマとして、行政、建築設計、住民まちづくり、研究者の各立場から関門海峡の景観形成について意見を交換し、県境を越えた景観条例の意味と今後の展望について考える。第1日目(6月8日)に関門の建築群を見学した後、第2日目(6月9日)に「関門景観と建築デザイン」、「関門景観条例とまちづくり」の2部構成によるパネルディスカッションが行われた。パネルディスカッションは、学会以外の市民にも広く呼びかけ、108名が参加した。

主旨説明

上和田茂(九州支部建築計画委員長・九州産業大学)

下関市と北九州市の長年にわたる努力の末、海峡をはさむ両地域の景観づくりを目的として、県境を越えて共同で条例が策定された。これまでの歴史で類例のない画期的な試みであり、海峡という共通の景観資源に対して、今後どのように景観形成を図るべきか、大きな課題である。今回の研究会がその契機となればと考え、企画した。

条例の制定に尽力した2名の先生の基調講演の後、パネルディスカッションを2部に分けて行う。第1部のテーマは「関門景観と建築デザイン」と題し、主として建築デザインと景観との関係について、第2部のテーマは「関門景観づくりとまちづくり」と題し、まちづくりと景観との関わりについて議論してもらいたい。

景観の議論は、いかに保全をしていくか、一方で、いかに新たに創造していくかという両面の視点が必要であると考え。両者の視点が相まって展開されることを期待する。

基調講演「関門景観条例について」

岡 道也(福岡都市科学研究所・関門景観審議会委員)

末益 迅(北九州市建築都市局都市美デザイン室)

末益氏より「関門景観条例」の理念と制定経緯、主な条文の内容について解説があり、その後、制定に関わった岡氏より本条例の策定段階における論点について、以下の5点が指摘された。

1. 複数の市に跨るといった制度的な特徴。北九州市は昭和60年に、下関市は平成8年に、それぞれ都市景観条例を制定している。今回の条例では二重なるため、条例そのものの位置づけ、どこまで規定するのかといった苦労があった。

2. 関門景観の範囲の設定。関門景観基本構想に関門景観区域を設定している。しかし、この全体を景観コントロールするのは難しい。今後、地区指定がされていくが、調査対象としては関門海峡全域として始めている。今後、もっと狭い範囲に絞り込む必要もあるのではないかと。
3. コントロールの対象。対岸を見ることを前提とした景観として概念的には理解できる。しかし、何を大切にしたいのか。山並みの自然環境、水辺沿いのまち並み、人々の活動等。さらにコントロールの対象は、建築レベルの高さ、ボリューム、壁面の色等になる。さらに、詳細な規定が必要か、また、大きな土地利用はどうすべきか。何をどういう形でコントロールするのか。ふつうの市街地型の景観コントロールとは異なった視点が必要となる。
4. 誰に対して景観を整備するのか。対岸からの景観、対岸の市民に対するパートナーシップだけではなく、実際には生活者の要求も重要である。つまり、整備主体と恩恵を受ける側が一定の距離を持たないといけない。まちづくりに非常に大切なことを含んでいる。
5. 制度として景観に関する資料や情報を整備しないとけない。下関と北九州では微妙に異なっている。例えば、土地利用に関する基礎情報等で、行政上の運動性、一体性が必要であり、その仕組みづくりが問題となる。

パネルディスカッション1「関門景観と建築デザイン」

常岡 稔(日本設計/市立しものせき水族館海響館、北九州市立国際友好記念図書館)

堀口豊太(京都市立芸術大学/門司港ホテル)

仙田 満(東京工業大学/海峡ドラマシップ)

まず、パネラーの3氏より、設計意図と関門景観に対する配慮について解説され、その後、中園真人(山口大)をコーディネーターとしてディスカッションが行われた。

(常岡稔)

下関・門司の両側で仕事をした。門司では、北九州市の友好記念図書館を約10年前に計画した。これは大連市の中にある歴史的な建物を門司区レトロ地区に複製建築する事業であった。これは、帝国主義時代にロシア人がドイツ人の建築家に依頼し、設計した建物で、19世紀のドイツ風の容姿となっている。これを実測調査、文献調査の後に図面化して復元した。建設では煉瓦や石は大連から運び、職人を呼んで施工した。つまり、これは保存でも創造でもなく、複製であり、本来の都市の歴史的文脈とは関係のない建物であり、問題があると考えていた。しかし、完成するとそれ程違和感がない。こ

これは、デザイン的な要素もあるが、門司港そのものが歴史的に開かれた交易の場として、外部を受け入れるような都市の仕組みを持っているためだと考えている。

次に、下関市の水族館、海峡館では、海と陸との境界をどうデザインするか、都市の海峡をどうデザインするかがテーマであった。眺望と風景の一体化、都市の境界のアクティビティをデザインすることが重要であると考えた。対岸も含めた見る・見られるの関係、染み入るような人の出入りを考慮した。また、夜の風景を細かくチェックした。緑のサッシュと外壁のレンガ色は、かつてこの下関の海側に建っていたアメリカ領事館の素材を採用した。さらに、様々な場面で海峡を借景眺望とし、展示等の現実の環境と風景の一体化を試みた。

（堀口豊太）

まちづくりの関心が高まり、消費者側の意見、要求に対して建築家が意識するようになった。建築家の個性を建築で表現する時、社会、共同体とどのように調整するかが重要となる。門司港ホテルの敷地は船溜まりで、水の中に突出しており、湾によって裏と表がある。南側には門司港駅があり、そこから町並みが広がっており、その逆の海側は、個人・共同体から開放される海峡で、この自然環境と都市環境を一つの建築で調整するかが課題であった。設計者であるアルドロッシの姿勢、ヨーロッパの長い歴史の中で育まれてきた建築伝統を再評価する姿勢はアメリカで初めて脚光を浴び、それが世界に広まり、日本でも仕事をするようになった。その最初の仕事は、イルパラッソ（1989）で、最後の作品が門司港ホテル（1998）である。共通した手法は、立方体を9分割して、その中で人体を投影する形で建築の身体を考える。換気や採光などの機能から最も離れて、ものの存在が明確にするファサードでは開口部を設けていない。門司港ホテルではアーバンリゾートという矛盾した条件があり、都市的な存在であるとともに、自然に開かれた状態でもある。そのため、非常にはっきりと二面性を持っており、公共の街路に面した表側と自然に面した庭園の裏側がある。街路側では、門司港駅からは建物で道が終わっているように見え、直進して建物の中に入って行くような印象を与えており、その視覚的な状況を利用して、タワーを分割し、中央に実線が通り、これを敷地内に導入している。その実線を中央にして9分割の方法で機能を区分している。

建築家は、拠点を作ることに優れている場合が多いが、拠点とその間を結ぶのは匿名で無名の建物である。建築家の意識も必要であるが、これをいかにしてコントロールするかが非常に難しいまちづくりの観点だと感じる。

（仙田満）

海峡ドラマミュージアムが現在建設中である。1997年頃、まず展

示の設計から関わっているが、この施設は県と北九州市のジョイント施設で、公共施設の中でも特異である。地元との長い期間の打ち合わせで、既に基本計画が作成されていた。この施設は歴史博物館であるが、それ以上に集客施設でもあり、まちづくりの拠点施設という役割を担っている。我々は、陸と海との交差点、歴史が始まる所、人の出会い、ドラマの舞台、人の心を開く水の景観といった様々なキーワードを考え、単なる歴史博物館ではなく、観光的、学習的な記憶装置であり情報発信装置、地域アイデンティティとしての様々な課題を提示するものである。特に、海峡という水面に面しており、水を見るということは心を安らぐ癒しの空間としての非常に重要な機能がある。ターゲットを狭く絞るのではなく、子供から高齢者まで非常に多様な年齢に対して対応しているような施設を考えた。歴史博物館としては、人形を少しベースにした展示を提案した。

景観的には、敷地に近接して陸側に歴史的なアールデコの建物があり、これをミュージアムが遮るのではなく、将来的に海へと展望する形で提案した。我々の設計の前から既に除却された銀行の古い建築を合わせたレトロ口街と海峡ミュージアムという二つの大きなブロックがあり、レトロブロックとドラマシップという二つの建物で分棟化し、ファサードや意匠を分けている。

（ディスカッション）

（下関と門司は海峡の街であるが、それが持つ歴史性と場所性をどのように捉えて新しい建築を設計されたか。）

（常岡）門司は、外部、他者との交流によって都市の力を得てきた。それをどのように継承するかが問われる。このような歴史性は、門司港の背後に行政都市があり、さらに小倉があり、さらに福岡という背後にある都市との役割分担、連携があり、これがレトロ口地区の建築を受け入れる素地となっている。逆に下関市は堂々と海峡に境界をさらしている。このような歴史性を活かさないといけない。海辺の都市は、近代化の開発の中で都市らしい雰囲気を持っている。それを再生することを意識して海響館では日イギリス領事館の外壁の煉瓦、サッシュを用いた。

（堀口）建築群としての文化の継承が必要である。欧米では模倣を含めて意識的に1つ1つの建築が造られ、100年の単位でみると文化となる。日本にはその素地が失われている。近世以前の建築に比べ、それ以後の建築の保存・修復の状態が良くないと思う。まず、そこから始めるべきであり、欧米の建築群から学ぶべき点が多いと感じる。

（仙田）建築と建築との距離、すなわち建築の個体距離、デザインエレメント、緑、この3つの関係が景観を考える上で非常に重要である。日本の歴史的な街は個体距離が非常に小さく、まち並みのそれぞれのエレメントが共通化してないと成立しない。一方、高級住

宅街では、敷地が広くて建物と建物の距離が十分にあり、その間に緑があるので、バラバラにデザインされても、街の雰囲気は変わらない。小さい個体距離を緩和するためには、その間に緑を多く投入するか、デザインの共通要素が必要である。海峡ミュージアム距離と緑とデザインレベルの関係が重要視している。また、門司は背後が山であるため、景観が重層化している。緑のスカイラインを尊重し、背後の建物ほどエレベーションとして高くなるような景観形成が必要である。これは、背部の緑と調和、海沿いの建物の色彩といった計画も考えなければならない。その意味で下関の海峡館の煉瓦の選択は正しいと言える。

(関門の両岸には性質の異なるタワーが建っている。関門海峡の建築的ランドマークとはいったい何を意味するのかという議論がある。関門海峡におけるランドマークとしての建築の意味をどう考えるか。)

(常岡)都市と農村、都市と都市の境界が不明瞭で、都市のコントラストが見えなくなっている。関門では海峡に面しており、非常に明快なコントラストがあり、これを品よく強めるようなランドマークが必要である。コントラストを壊すランドマークは不必要である。

(堀口)ニューアーバニズムに注目している。デザインコードによってまち並みを誘導する。建築形態、色彩、材質、屋根の傾斜、個体距離等、これによって経済的な効果があり、不動産の価値が上昇する。市町村も潤う結果となる。地域の活性化に関与するという点でニューアーバニズムは注目されている。今後日本でも採用できるのではないか。

(仙田)先程の個体距離とグリーンとデザインエレメントはまちの雰囲気を規定する。例えば、楠はどんどん大きくなり、常緑樹なのでまちは落ち着き、活性が低くなる。門司のような商業空間の中には、葉が落ちて冬は明るい日差しが入る方がよい。統一した景観でない方が、少し心がわくわくして刺激的となる。この意味でランドマークは、地域住民、行政、参加している建築家も含めて議論しながらまちのシンボルとして機能すればよい。

その他会場より、門司港レトロ地区と陸側の既存商店街、住宅との関係について質問があり、堀口(前掲)より地域住民である歩行者優先の整備によって両者を上手く繋ぐ方法が有効であるという回答があった。

パネルディスカッション2「関門景観条例とまちづくり」

中野恒明(アブル総合計画事務所)

上田曜子(門司の景観を考える女性の会)

安成信次((財)下関21世紀協会)

末益 迅(前掲)

原田勝喜(下関市都市整備部都市計画課)

岡道也(前掲)をコーディネーターとして、まちづくりに関わるコンサルタント、地域住民、行政の各立場から、関門景観の意義とそのあり方についてディスカッションを行った。尚、コメンテーターとして、片野博(九州芸工大)、仲間浩一(九州工業大)が加わった。

(関門のまちづくりへの関わりと条例への期待について)

(中野)15年門司港レトロにかかわってきて、景観が経済効果を生み出すことが分かってきた。下関と門司は700mの距離で、これは海外では川のスケール感で対峙している。このことは、まちの活性化において重要であり、常に対岸を意識して計画してきた。門司の高層マンションは対岸からの景観を考えたとき、背後の山のスカイラインを越えており、異質である。このように建築が風景を作る意味は大きい。本来マンションは日当たりが価値を生むが、門司では西側の関門海峡を望む部屋が一番高い。海峡がみえることが一つのステータスです。

門司港レトロ地区、船溜まり地区から、堺町、古い商店街へどうお客さんが流れていくか、それをどう作り込んでいくかということが課題である。門司では、15年前に船溜まりを埋め立てるという計画があったが、地元の反対があり、最終的に私達もなぜ埋めるのかを考えた。当初は埋め立て地を売却して町の活性化を図るストーリーであったが、私達が残すことを提案し、今の景観がある。残すべき価値がある景観資源とは何か、ディテール含めて建築を研究されることを期待する。

関門景観条例は画期的である。景観が経済効果を持つことが認識された。よい風景を残すことは、後世に残すべき社会資本、環境資源である。心地よい空間を尋ねて、人口増えてきます。これは世界的な傾向である。今後の課題は、下関側との連携である。

(上田)門司の景観を考える女性の会の活動では、マンション建設において母親の視点から考えてきた。

景観条例第2条に安心している。子供を安心して育てられる景観そしてまた、年長者率の高い門司では、年長者が心安らかに暮らせることが大事である。今後の私達の暮らしとどのように関わっていくのか期待している。

(安成)昭和60年にまちづくりの民間の団体として結成された。下関は、海峡と海峡に育まれた歴史と文化の町、多くの歴史の節目に登場する舞台の町である。

唐戸近辺は歴史的建築も多く残っており、今回の関門景観条例に期待する面は大きい。まちづくりの団体としては、その条例がど

のように運営されるのかという課題がある。特に、門司にはレトロという明確なコンセプトがあるが、下関のほうはやや不明確である。唐戸周辺では、デザインのミスマッチといった失敗を経験している。景観を判断することは難しい。

(原田)門司を対岸として意識しているのではなく、生活している下関の一部、つまり自分のテリトリーとして眺めているという側面があると思う。わずか十年の間に観光資源としての関門海峡の価値は向上した。関門景観とは何かをしっかりと固め、我々の本当の財産として行きたい。

(門司港レトロの15年間では、ウォーターフロントの整備、景観の整備によって経済効果が確認された。今後、門司港の景観と既成市街地の活性化との結びつきはどのように展開されるべきか。)

(中野)門司港レトロの活性化と地元の活性化の結びつきは一番の課題として認識していた。私は根本的に人が住むということを放棄した街はもう廃れていると思っている。門司港では、地元の方が快適だと思うようなまちにすることをまず目指した。心地良い空間をつくると居住する人が増加し、これが地元の商店の活性化に繋がる。このような信念を持っている。あと10年で本当の定住人口が増えると考えている。門司港レトロは本物志向であり、地元のためのまちづくりある、景観整備はまちづくりと重なっている。

(地域住民の視点から、これからのまちづくりをどのように展開していきたいと考えているか)

(上田)門司港レトロは、門司の住民にとっては大きなプレゼントだったと感じる。これからは、地域住民が門司港レトロの快適な空間に見合った質の高い生活を過ごしていくことが大事だと思う。このことは、観光の店舗とは異なる日常の店舗の活性化にも繋がる。

(安成)歴史的な観光資源はあるが、市全体としては中心市街地の衰退がみられる。まず、何よりも住んでいる人が誇りに思えるまちとしたい。関門景観条例で協議された点を下関の水際のようなまちづくりの視点として協議していく組織づくりをしていきたい。商工会議所と行政、NPOの中でそれらを協議し整備する。戦略的で安定したまちづくり組織の活動を継続することが重要だと思うが、難しい課題である。

(船からの景観について、また、対岸という意識ではなく、関門が一体となった景観形成の視点があるのではないかと仲間(前掲))

(末松)関門景観の視点場の問題は大きい。両岸の距離感によって見え方は違う。関門海峡は国際航路であり、大小700隻が毎日通過している。船からの景観は重要であり、関門地域が国際的に有名な景観の都市になる可能性もある。今回の指定地区は限定的であるが、今後、生活している住民に認知されるに従って、関門の景観の区域は広がっていけばよいと考えている。

既存の景観条例との関係には苦慮した。この条例は対岸だけを考えているのではなく、『町並みの景観のみならず』という頭書きが入っており、周辺住んでいる人の心地よい景観を作るとともに対岸・海からも望ましい景観を形成しようということが関門景観の基本的な考え方である。

以下、一般の参加者からの質疑を受けつけ、景観的な色彩だけでなく、容積率等の建築物の規模の制限についての対応、関門海峡ロープウェイ整備の構想の景観的価値と景観条例でのスタンス、

観光に対する駐車場の必要性和景観上の問題、以上の具体的なケースに対する景観条例の解釈、スタンスについて質問があった。具体的なケースに対しては、条例上の解釈が解説されるとともに、今後、景観審議会における景観を判断する基準を明確化、また、景観的側面だけではなく、経済的効果等まちづくりの視点からの判断、地域住民の方々のまちづくり運動を通した関門の景観に対する積極的な働きかけ等の課題が提示された。最後にまとめとして、コメントターの片野博(前掲)より水をエレメントとしたツインシティとしての景観整備とまちづくりについての可能性が示され、閉会した。